

ポストモダンな学びの構築  
- 「私塾」におけるその理論と実践 -

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
対人援助学領域  
家族機能・社会臨床クラスター  
北村 真也

本稿の舞台は、「アウラ学びの森」という一つの私塾である。この私塾は、いよいよ 21 世紀がスタートした 2000 年に、筆者自身が子どもたちの学びやその関係性の現状からポストモダンな学びの必要性を感じとり、新しい学びの形として理論を構成し、それを私塾というフレームの中で現実化したものである。そして現在に至るこの 10 年の間に多くの子どもたちや教師たち、そして親たちがそこにかかわり、それぞれ変容を遂げてきたのである。本稿においては、そんなアウラの学習者たちの変容の様子をエピソードとして取り上げながら、そこに関わる様々な人たちの複数の文脈をていねいに見つめ直していくことで、ポストモダンな学びの現状を描き出し、その構造を見つめていくこととする。

本稿の具体的な内容としては、 章で、様々な教育問題をモダンな時代にデザインされた教育システムとポストモダンな時代に生きる子どもたちの生活世界との乖離として捉え、さらに、その乖離の中から新しい教育に求められる要素を抽出していく様子を述べている。 章では、アウラ学びの森の前史、すなわち筆者自身の学びの個人史の中でアウラの設立動機がどのようなかたちで育ち、また位置づけられてきたのかという背景を述べている。 章では、筆者自身がポストモダンな学びの場としての 学びの森構想 を立ち上げ、3 つ理論を引用しながらそれらを具体的に現実のものとしていく過程、そしてさらには、この学びの森を固定化するのではなく、常に変容させながら維持していくための仕掛けについて述べている。 章では、ポストモダンな学びを考える上で最も重要な 変容 に注目し、社会との関係、さらには変容学習理論、そして 変容 と 構築 という、相反する要素を併せ持つことの重要性、さらにはそれを可能にする階層的思考について述べている。そして 章では、N.ルーマンと A.ギデンズの 2 種類の再帰性が交差し、ますます不透明となっていくポストモダンな社会においては、個人が再帰的に自己自覚的に自分自身を定義し続けることが重要であり、新しい学びはまさにそのことを実現させるためにあるということを述べている。本稿は以上のような内容構成をとるが、全編を通じた特徴として筆者自身のアウラへの関与そのものをも論述の対象としていることがあげられよう。すなわち筆者は、ここに論じている場そのものを自ら作りだしている存在であり、常に主体として変容しながらそこに関わり続け、そして学習者である子どもたちやその親たち、そして教師たち、あるいは筆者自身をも描き続けている。

本稿の最大の目的は、ポストモダンな学びの実践の理論化であって、ある特定の理論の検証を目的とするものではない。あくまでエピソード分析がその軸にあり、それを理論化するために関連する先行研究を整理しながら引用するものである。さらに、それぞれのエピソードは、決して恣意的に並んでいるわけではない。それは文脈をもったシークエンスの上に成り立っている。そこにはアウラに関わる子どもたちや教師たち、そして塾長である筆者自身のシークエンスがあり、さらにアウラ全体のシークエンスがあって、共時的な関係性を作り上げている。